

「マカーリエと古典主義」

清 水 純 夫

——はじめに——

『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』（以下『遍歴時代』と略す。）の第一稿が書き上げられたのは1821年である。しかしその時にはマカーリエの場面はまだほとんど手をつけられてはいなかった。マカーリエが初めてその全貌を現わすのは1829年に完成された第二稿、即ち最終稿においてである。そして1832年にはゲーテは世を去っているの、マカーリエはまさにゲーテの最晩年の構想ということになる。

このころのゲーテの作品には難解なものが多いが、『ファウスト』と並んでこの『遍歴時代』も難解さの点ではその最たるものであろう。しかもマカーリエの箇所は『遍歴時代』の中でもとりわけ理解しにくく、そのためかゲーテの他の作品ほどには作品研究もまだ進んでいないように思われる。それでもあえて現時点で諸説の特徴を整理すると、二つの流れに大別出来よう。一つは、ゲーテ自身作品の中でマカーリエを「聖女」と表現しているように、マカーリエを肯定的に捉える流れである。たとえば Schiff は、マカーリエは「永遠に女性的なるものの代表であり且つ超現実的な自然認識の代表⁽¹⁾」であると述べ、David もマカーリエは「永遠に女性的なるもの⁽²⁾」であるとし、どちらも『ファウスト』の結末に出て来る「永遠に女性的なるもの (das Ewig-Weibliche)」の規定をマカーリエに与えている。また、Korff によればマカーリエは「神秘的な原初の巫女 (Ursibylle)⁽³⁾」であり、Schlaffer では「人間の不死の化身⁽⁴⁾」となり、いずれもマカーリエは神秘的な存在となっている。Trunz は「マカーリエは神的なもの⁽⁵⁾と人間的なものが触れ合う領域に属している。」、「彼女は全ての人々にとって聖者であり、救済者である。」⁽⁶⁾と述べ、聖なる救済者の面を指摘する。さらに、Henkel は「この世の中には諦念の最高の段階としての完全さが存在する。それをゲーテはマカーリエの姿の中に示した。」と述べ、Reiss も「マカーリエにおいては諦念の最高の段階が達成されている。」⁽⁸⁾としてマカーリエの諦念を強調している。

こうした肯定的な評価に対し、マカーリエに疑問を投げかける説も無いでは無い。たとえば Bahr は、「この善良な年老いた伯母は語り手によって『聖女』、『原初の巫女』と呼ばれている。……しかしこの形象がドグマとして合理化されたり、ロマン主義的な聖女像として情緒的なものにならないためにはイロニーが必要である。……マカーリエは伯母であって伯母ではなく、聖女であって聖女ではない。伯母であり且つ聖女なのである。」⁽⁹⁾と述べ、マカーリエの神聖さ

(1)

を相対化しているし、Degering にいたってはマカーリエは全面否定される。マカーリエについての彼の説を要約すると次のようになる。マカーリエは聖女だと読者に感じさせるように描かれているのであって、マカーリエの実体は決して聖女でも諦念者でもなく、妄想を抱く病人にすぎない。甥のレナルドーに対しては盲目であることもそれを裏付けていると。⁽¹⁰⁾

こうした見解の対立を念頭に置いた上で、本論文ではマカーリエの存在意味、その本質と問題点を探り、筆者なりにマカーリエの評価に一つの結論を下してみたい。

— 1 —

晩年のゲーテでは救済が大きな関心事となっている。1831年6月6日のエッカーマンとの対話で、ゲーテが『ファウスト』の結末についてその一節を引用しながら次のように解説している。

「霊界の高貴な方が
悪から救われました。
絶えず努力し精進する者を
我々は救うことができます。
その上、彼には
天上からの愛が与えられたのです。

この詩句にファウスト救済の鍵が含まれているのだ。ファウスト自身の中には死ぬまでますます高まり、純粋になる活動があり、天上には彼を救済しに来る永遠の愛がある。このことは、我々は自力ではなく、神の恩寵が加わって初めて救済されるという我々の宗教観と完全に一致する。⁽¹¹⁾

救済に並々ならぬ関心を寄せていたゲーテは、『ファウスト』とは違って、『遍歴時代』という現実を舞台にした小説の世界においてはマカーリエという「聖女」に「天上からの愛」の役を与え、救済を行わせている。それではマカーリエは一体誰を救済しようとするのか。

先の論文で、⁽¹²⁾ 筆者はテレゼとナターリエという二人の人物の教育原理の対立は排他的競争原理と愛の原理の対立であって、その諦念とは前者においては人格の放棄であり、後者においては人格を守るための無私無欲という正反対のものであることを示した。資本主義化が進むにつれ、人々もまた否応なしにこの二つの原理の選択を迫られたのである。たとえば、『遍歴時代』に描かれているごとく、山岳地帯の牧歌的な家内制製糸工業が押し寄せる機械化の波を前に今まさに危機に瀕し、生きのびるために嫌悪している機械化を自ら進んで導入し、自分も他の弱小製糸工業の破壊者に成り代わるか、或はそれらを潔く拒否してこのまま滅びるにまかすかという二者択一の選択を迫られているのはその典型的な例であろう。

資本主義の排他的競争原理に積極的に呼応して自己の延命を図るという流れに逆い、あくま

でそれを拒否して、無私無欲の諦念の上にドイツ古典主義の求めたヒューマニズムを守る努力は明るい展望の持たないドイツの現状では苦しいものにならざるをえない。物理的な外的救済が不可能である以上、今や諦念者たちをその苦しみから内面的に救済することが緊急の課題となる。彼らの救済を使命としてマカーリエは登場するのである。

しかも、彼女の使命は実はそれだけにとどまらない。本来なら諦念に苦しむ者たちは美と調和の明るい古典主義によって救われるべきであろう。しかしゲーテとシラーに代表されるドイツ古典主義は1805年のシラーの死と、1806年のイェーナの戦いでドイツ軍がナポレオンに指揮されたフランス軍に敗北し、⁽¹³⁾ドイツ国内が占領されて大混乱に陥ったことにより、その存在の基盤を失っていた。古典主義の崩壊に直面したゲーテは、永遠と有限の調和、即ち永遠化された有限という、古典主義の中に封じ込めてきた永遠を求めて美しき瞬間の中に散っていくシュトゥルム・ウント・ドラングのデモーニッシュな衝動が再び蘇るのを感じ、危機感を強めたはずである。『親和力』の暗い情念の世界はそのことを端的に物語っている。それは『ローマの悲歌』や『ヘルマンとドロテア』の明るい古典主義の世界とはまるで別の世界なのである。

さらに、ゲーテの危機意識を一層煽りたてたものとして、ドイツロマン派の運動が挙げられる。十八世紀末に、ゲーテのいるヴァイマルの目と鼻の先のイェーナに前期ロマン派として起こったこの文学運動は、十九世紀になると後期ロマン派に引き継がれ、ベルリンやハイデルベルクを中心に活発な活動を行った。晩年のゲーテとは時期的に丁度重なるわけである。古典主義の中核的要素はロマン主義とは相容れないもので、それ故、最初は『修業時代』を、フランス革命とフィヒテの知識学と並ぶ、時代の最大の潮流だと言って絶賛していたF・シュレーゲルもやがてゲーテに背を向けるようになるし、ノヴァーリスも『修業時代』を愛読しながらもロマン主義的神秘主義とは無縁なその散文的傾向には強く反発した。またゲーテは、「古典主義を私は健全と呼び、ロマン主義を病的と呼ぶ。」⁽¹⁵⁾という有名な台詞にみられるように、そうしたロマン主義に批判的であった。

とくに前期ロマン派にゲーテは病的な印象を抱いたのであるが、それはこのロマン派の持つ極端な主観主義、恣意、自己主張、過度の空想や非現実性などに由来する。そこで、古典主義から見て明らかに不健康、病的に思われるロマン派やシュトゥルム・ウント・ドラングの復活の兆から健全なヒューマニズムの精神を救うために、ゲーテが古典主義の最後の力を振り絞って試みた戦いがマカーリエ像の創作なのである。即ち、マカーリエは諦念の苦しみからの救済と、崩壊の危機に立たされた古典主義の救済という二つの使命を持った存在なのであり、その使命を遂行するところに彼女の存在意味があるのである。

— 2 —

だが、マカーリエの形象化は簡単なことではない。なぜなら、先に述べたように古典主義の存立基盤は事実上崩壊しており、古典主義全盛期のように調和した美的世界を描いた作品を生

みだすことはもはや現実には不可能となっていたからである。この時期の作品は『親和力』のように再び暗いデモニッシュな衝動が全面に出て来たものとなるか、それとも『ファウスト』や『遍歴時代』に見られるように、筋の面白さと作品としての統一に欠けた、断片的なものの寄せ集めとならざるをえない。マカーリエに古典主義の豊かな肉付けを施し、リアリティーのある人物に造り上げることはもはや不可能なのである。

それにもかかわらずマカーリエ像を造り上げるために、ゲーテは今回はあえて理念を直接形象化することを試みた。こうしてマカーリエは古典主義の究極の理想像として、体験を基に具体的個別から普遍へ向かったそれまでのゲーテの創作手法とは全く異なり、抽象的理念からいきなり造り出されたのである。こうした事情から、やはりマカーリエは現実性に乏しく、とくに女性の感性、官能は全く感じさせない存在となってしまった。だがそのことに関するマカーリエの文学的完成度の評価はここでは棚上げし、まずその基となっている理念から出発することにする。

1786年から2年余りイタリアを旅行したゲーテは、当地に滞在中に原植物という概念を抱くようになった。「こんなにもさまざまな新しい、また新しく形づくられた形象を目の当たりにすると、こういった群の中に原植物を発見できるかも知れないというあの昔からの気まぐれが再び頭をもたげて来るのだった。絶対にこの植物はあるはずだ！もし植物が全て一つの原形に従って形成されたのでないならば、あの形象もこの形象も同じ植物だということがどうして私にわかろうか。」⁽¹⁶⁾ 「……こうした植物はたとえ存在しないとしても存在しえるものであり、……内的な真理と必然性を持っているのである。この法則は他の全ての生物にも適用可能であろう。」⁽¹⁷⁾ 1794年、ゲーテとシラーの歴史的な出会いの場で、ゲーテが植物の変態について述べ、抽象的な植物をペンで書いて示した時に、シラーは、「それは経験ではなく理念です。」⁽¹⁸⁾と言っている。

全ての植物は、原植物という「一つの原型に従って形成された」ものであるからには、どの植物の中にも原植物の面影が認められるはずである。原植物と一般の植物の関係は、言わば、根源的な、絶対・永遠な存在と、現象的・有限な存在の関係と言えよう。しかも後者には前者の面影が宿るのだから、有限な一般植物の中には原植物の絶対・永遠性も宿ることになる。即ち、原植物によって、一般植物は有限であると同時に永遠の刻印をも押されていることになる。ところで、古典主義の目差すものも、永遠化された有限という形での永遠と有限の両者の調和であった。それ故、原植物はまさに古典主義の理念を植物に適用したものと言えよう。イタリアで古典主義を完成したゲーテにとって、原植物の考えはその中核となる理念なのである。そして、古典主義の終焉ともいべき時期を迎えた今、背水の陣を敷いたゲーテが理念を直接形象化するという非常手段に訴え、理念である原植物を人間に直接適用して造り上げたのがマカーリエなのである。そこで、具体的に作品の分析を通してマカーリエの本質をさらに明らかにしていこう。⁽¹⁹⁾

— 3 —

まずヴィルヘルムが初めてマカーリエを訪ね、面会した時の印象は次のように描かれている。「緑のカーテンがあげられ、大層気品のある初老の貴婦人が安楽椅子に腰掛けたまま、二人の若く美しい乙女に押されて入って来た。……マカーリエは親しい人に話すようにヴィルヘルムに話しかけた。彼女は楽しそうに自分の親戚について機知に溢れる表現で語ってくれた。それはあたかも彼女には各人がつけている仮面を通して内的本性を見通すことが出来るかのようであった。ヴィルヘルムの知っている人たちが変容したように彼の魂の前に立った。この測り知れぬ夫人の洞察に富んだ好意が彼らの殻を割り、健全な核を高貴にし生命を吹き込んだのであった。」⁽²⁰⁾

また、この家に長期滞在している客人の天文学者に金星を見るように勧められたヴィルヘルムは、夜になるまで待つうちに深く眠り込み、不思議な夢を見る。「私は穏やかに横になって深い眠りについていました。するといつの間にか昨日の広間に一人ではありませんか。緑のカーテンがあげられ、マカーリエさんの椅子が生き物のようにひとりでこちらへ動いて来ました。椅子は金色に輝き、彼女の服は司祭のそれのようでした。彼女のまなざしは穏やかに輝いていました。私はひれ伏しそうになりました。彼女の足のまわりに雲が広がり、上昇しながら翼のように聖なる姿を運んで行きました。彼女の厳かな顔のかわりに、ついに私は散り散りになる雲間から星が一つ光っているのを見ました。この星はますます高く運ばれ、開かれた丸天井を通して星空全体と一つになりました。星空はたえず拡大し、全てを包み込むように見えました。あなたが私を起こしたのはその時です。星の姿がまだ目に焼きついたまま、寝ほけまなこで私は窓辺に歩み寄りました。そして見上げると——明けの明星が、壮麗な輝きの点では劣るにしても、美しさの点では引けを取らず、本当に私の前にあったのです。彼方に漂う現実の星が夢に見た星に取ってかわりました。この星は幻の星の壮麗さを吸収したのです。私はじっと眺め続けました。」⁽²¹⁾ それを聞いた天文学者は次のように叫ぶ。「奇跡です！本当に奇跡です！あなた自身どんなに不思議なことをおっしゃったか御存知無いです。このことがあの立派なお方の別離を暗示していなければいいのですが。遅かれ早かれあの方はこういう神化を受けられるのです。」⁽²²⁾

天文学者のこの言葉の意味は、後日、マカーリエの身の回りの世話をしているアンゲーラの説明でヴィルヘルムに明らかにされる。「マカーリエ様にとっては太陽系の諸関係も最初から全く生まれつきのもので、はじめは眠っていたのがだんだん発展し、ついにはいよいよはっきり活気づいてきました。はじめはこの現象にお悩みになったのですが、後にはそれを楽しみ、年とともに恍惚の度が増していきました。しかし本当に気持ちが整理され、落ち着かれたのはあの友人にして協力者を得てからです。その方の功績についてはあなたもよく御存知だと思います。数学者であり哲学者である友人は、はじめは信じようとせず、こういう直観は習得され

たものではないかと長いこと疑っていました。なぜならマカーリエ様は昔、天文学の授業を受け、熱心にそれに取り組んだことを告白しないわけにはまいりませんでしたから。それと並んでマカーリエ様はまた、人生の長きにわたって内面での現象と外界での知覚を並べて比較したけれどもその点での一致を見い出すことが出来なかったと報告されました。そこでこの学者は、ほんのたまにしかマカーリエ様にもはっきりすることは無いのですが、とにかくマカーリエ様が直観されたものを出来るだけ詳しく述べてもらい、計算をし、そしてマカーリエ様は太陽系を自分の内面に持っているというよりはむしろその主要な部分として、太陽系の中を動いているという結論に達しました。この前提に基づくと彼の計算は信じ難いほどマカーリエ様の証言によって裏付けられたのでした。⁽²³⁾そしてアンゲーラは、「こういう神秘的な直観や恍惚とさせる幻はあなた方のところでは病気と思われるものですので、そのためマカーリエ様には目下のところ世間とその利害にかかわることが妨げられているのです。このことは胸の内にしまっておいて下さい。」⁽²⁴⁾と言ってヴィルヘルムに釘をさす。

以上が作品の登場人物のやりとりの中で描かれたマカーリエ像である。この後マカーリエは作品の表舞台からは退くが、作品が大団円を迎える大詰めところで再び登場する。しかも、物語りの語り手によって、先に引用したマカーリエの特性がそこではより突っ込んで体系的に描写されている。「マカーリエと我々の太陽系との関係は何とも名状し難いものである。精神や魂や想像力の中に彼女は太陽系を抱き、見るばかりでなく、言わばその一部を成しているのである。彼女は天界の中を自分もともに引っぱられていくのを見る。しかも全く独特の方式で。彼女は子供のころから太陽のまわりを回っている。しかも今や明らかになったところでは螺旋形を描きながらますます中心点より遠ざかり、外の圏に向かって回転して行くのである。存在するものはそれが肉体的なものである限り中心を求め、それが精神的なものである限り外縁を求めるとの仮定が許されるなら、我々の女友達は最も精神的なものに属する。彼女は自分を地上的なものから解放するために、存在の最も近い空間から最も遠い空間に到るまで、そこに浸透するためにのみ生まれてきたように見える。この特性は全く素晴らしいものであるが、これはごく幼い頃より重い使命として彼女に与えられたのである。彼女は小さい時から自分の内的自我が輝く存在によって貫かれ、最も明るい太陽の光すら太刀打ち出来ない一つの光によって照らされていたのを思い出す。しばしば彼女は二つの太陽を見た。即ち、一つは内的な太陽であり、もう一つは天空の外的な太陽である。また二つの月を見た。外的な月はその位相にかかわらず同じ大きさのままであるのに、内的な月はますます小さくなっていった。この能力は彼女の関心を日常的な事柄から引き離した。しかし彼女の秀れた両親は彼女の教育に全力を注いだ。あらゆる能力が目覚め、あらゆる活動が開始され、彼女はあらゆる外的事情に対応出来るまでになった。彼女の心と精神は超現世的な幻に全く満たされていたが、それにもかかわらず彼女の行為や行動は絶えず最も高貴な倫理にかなうものであった。成長するにつれ、彼女はいかなるところでも援助を与え、大小にかかわらず倦むことなく奉仕をし、さながら神の天使のごと

く地上を歩いた。彼女の精神の全体は現実の太陽のまわりを巡ってはいたが、超感性的なものに向かって、絶えず大きくなっていく円を描いて動いていた。この過剰な状態は彼女の内部にも昼と夜があるらしいということで幾分緩和された。実際、内部の光が弱まると彼女は外的な義務を最も忠実に果そうと努め、内部が新たに輝き出すと至福の安らぎに身を委ねた。雲のようなものが時々彼女のまわりを漂い、天上の仲間たちの光景をしばらくの間朦朧と包むのを見たとき彼女は言う。それは彼女が絶えずまわりの人々の幸福と喜びのために利用することを心得ていた時期であった。……予知能力を持った彼女には、我々の太陽は昼間彼女がそれを見るよりずっと小さく幻覚の中に現われた。黄道十二宮における太陽の実際よりも高い異常な位置もいろいろな結論を導く契機となった。これに反して、直観するマカーリエが、1～2の星が同様に黄道帯に現われると暗示したのに誰も天空にそれを認めることが出来なかった時、疑惑と錯誤が生じた。それは当時まだ未発見の小惑星かも知れなかった。なぜなら他の報告から、彼女がとっくに火星の軌道を越えて木星の軌道に近づいていることが推論されたからである。明らかに彼女はしばらくの間、どの位の距離からかは不明だが、驚嘆しながら恐ろしいほどの壮麗さの中にこの惑星を観察し、その惑星を巡る衛星の戯れのごとき運行を見たのであった。しかしこの後、奇妙にも彼女はこの星を欠けていく月として、満ちていく月として我々が見るのとはちょうど正反対に見たのである。このことから彼女が木星を側面から見ていることや、実際その軌道を越えて無限の空間の中を土星に向かってまさに進もうとしていることが結論された。どんな想像力もそこまで彼女について行くことは出来ない。しかし我々は、このようなエンテレヒーが完全に我々の太陽系から遠ざかってしまうのではなく、その境界に達したら再び戻ることを恐れ、我々の子孫のために地上の生活と善行に働きかけてくれることを望むのである。⁽²⁵⁾」

以上の引用を整理してみよう。マカーリエは幼い頃より太陽系と不思議な神秘的な関係にある。それは年を取るに従ってますますはっきりとしてきた。彼女は太陽系の一部を成し、太陽系の中を精神的に動いているのである。それも螺旋形を描きながら中心から遠ざかり、外の圏へ向かっている。彼女のこの運行が妄想でないことは天文学者の計算により完全に裏付けられた。彼女の内部の光が弱まると彼女は外的な義務を果そうと努め、その行為はまた常に最も高貴な倫理にかなうものとなっている。そして内部の光が再び輝き出すと彼女は至福の安らぎに身を委ねる。彼女はまさに聖女なのである。ヴィルヘルムの見た夢もマカーリエの神秘的、神的性格を補強している。

さて、マカーリエが、必然の法則に従って運行する大宇宙の一部を成し、且つ自らも精神的にこの中を運行していることは、彼女が人間という有限な存在でありながら、同時に、永遠につながる存在であることを示している。だから Spranger も言うようにマカーリエにおいては「天上と地上の調和」⁽²⁶⁾がみられる。しかも天にあっては宇宙の必然の法則に従い、地上にあっては倫理の法則に従う言わば法則の化身のような存在であってみれば、彼女からは必然の対極

に位置する恣意というものが限りなく消え去る。⁽²⁷⁾それはまた無私無欲に徹することでもある。つまりマカーリエはナターリエ的原理である無私無欲の究極の存在、即ち究極の諦念に達した存在なのである。

さらに、マカーリエが自分の肉体的成長と平行して精神的に太陽系を飛翔し、螺旋形を描きながらそこから遠ざかりつつあるということは、スピノザの静止した汎神論とは異なり、ゲーテの汎神論は展開する運動を内在させていることを示している。Siebeck は、ゲーテは「スピノザの存在の汎神論を生成の汎神論に手直した」⁽²⁸⁾し、ゲーテにとって「自然は発展史を持つ」⁽²⁹⁾と言っている。自然の根底に横たわる原植物が生成発展する以上、当然、形象化された理念も自己運動しなければならない。マカーリエの飛翔がまさにその運動にあたる。しかも太陽系を飛翔して宇宙を認識する彼女の行動は、それが彼女自身の内面世界で行われる限り、彼女自身の自己認識を深めることに他ならない。つまりマカーリエは自己展開を通して自己自身の認識を深めているのである。このことはまた彼女はヘーゲルの絶対理念の立場に近いとも言えるのではないだろうか。ともあれ、ここでマカーリエの本質を再度確認しておこう。即ち、法則の化身、恣意の放棄、諦念の極み、自己展開を合わせ持った古典主義の究極の理想像、それがマカーリエの本質なのである。

— 4 —

古典主義の理想像マカーリエは「聖女」マカーリエとして「天上からの愛」、「永遠に女性的なるもの」を代表するごとく自己の使命である救済を試みる。それはこの作品の結末近くで、渡米を前に『修業時代』の登場人物も含めて再びさまざまな人物がマカーリエに別れを告げに集まってくる時に行われる。とくに注目すべき三人の人物について検討してみよう。

一人はフィリーネ、もう一人はリーディエと共に『修業時代』にも登場した人物である。フィリーネは蓮っ葉とも言うべき自由奔放な性格の故にヴィルヘルムの反感を買っていたが、今では二児の母親となり、アメリカへ渡って裁縫師として活躍しようとしている。他方、リーディエは結社の中心人物であるロターリオの愛人であった。だが彼女はロターリオに冷たく裏切られ、失意のうちに、結社のメンバーで彼の友人のモンターンの求婚に応じたが、依然心のわだかまりは解消してはいない。フィリーネとリーディエがマカーリエに面会する場面は次のように描かれている。「二人の罪の女を聖女の足許に見るのは全く奇妙な光景だった。彼女の両側に彼女たちはひざまずいた。二人の子供に挟まれたフィリーネは生き生きと優美に子供たちの頭を押さえた。いつもの快活な調子で彼女は言った。『私は夫と子供たちを愛しております。彼らのために、そして他の人たちのためにも私は喜んで仕事をします。その他のことはどうぞお許し下さい！』 マカーリエは祝福の言葉を述べ、フィリーネは恭しくお辞儀してその場を離れた。リーディエは聖女の左側に顔を膝につけてひざまずき、激しく泣いているため一言もしゃべれなかった。マカーリエは彼女の涙の意味を理解して、慰めるように肩に手を置いた。

それからマカーリエは自分の前にある彼女の髪の毛の分けぎわに、敬虔な気持ちから、熱心に、繰り返し接吻した。リーディエは立ち上がった。はじめは膝で、それから足で。そして清らかな明るさをもって恩人を見つめ、そして言った。『私はどうしたのかしら、何が私に起こったのでしょうか？心に重くのしかかっていた重荷が正気のかなりの部分と思慮の全てを奪っていたのですが、それが突然私の頭から取り払われました。私はもう自由に上を見ることも、考えを上に向けることも出来ます。そして』と彼女は深く息をしてから付け加えた。『私の心もそのあとに続くでしょう』と。⁽³⁰⁾そしてリーディエはそこに入ってきたモンターンをして、「大したことだと思う。なぜなら彼女のおかげでお前が私のものになるのだから。お前が素直にやさしく私を迎えてくれたのもこれが初めてなら、抱きしめてくれたのも初めてだ。もっともとくにそうしてもらって値打ちが私にはあったのだが。」⁽³¹⁾と言わしめるように心から彼を抱擁する。

こうして二人の女性はマカーリエの祝福を得たが、しかしフィリーネに関してはその後も依然として何も変わらない。「フィリーネの鉄はすでにびくびく震えていた。といのも、新しい植民地に衣類を供給する権利を独占しようと考えていたからである。」⁽³²⁾アメリカでの大儲けを想像してフィリーネは今からも興奮している。つまりフィリーネはテレゼ的原理である排他的競争原理に徹するつもりには変わりはないのである。それに対し、リーディエは、「あの幸せの祝福によって思いやりのある愛に再び目覚め、早くも自分の女生徒たちが百倍にも増え、大勢の主婦たちが厳密さと上品さを目差して手ほどきを受け、励まされるのを頭の中に思い描いていた。」⁽³³⁾とあるようにナターリエの原理である無私無欲の諦念に大きく傾く。結局この二人の女性の例を通して、最初から無私無欲の諦念を受け入れるつमりの無い者にはマカーリエの救済も無力であるが、無私無欲の諦念に苦しむ者にはその諦念に徹する時、救済が与えられることが明らかになる。

マカーリエと関わるもう一人の重要人物は、山岳地方で製糸工業を営んでいるズザンネ夫人である。押し寄せる機械化の波により牧歌的な家内工業が存亡の危機に立たされつつある現状の下で、彼女は自ら平和の破壊者になるよりは事業を断念する道を選ぶ。その上、彼女はひたすら亡くなった夫への誠から、彼女の昔の主人で、今では結社の指導者としてアメリカの移住の団を指揮しているレナルドの切なる求婚をもきっぱりと拒否し、ついにはマカーリエのところに来て彼女に仕えることとなる。ズザンネのこの態度は、資本主義の非人間化から自分の人間性を守るために全てのものを放棄するというまさに無私無欲の諦念の典型であって、マカーリエの救済を最も必要とする人物である。それゆえ彼女がマカーリエのもとに来るのも決して偶然ではない。

こうしてゲーテはマカーリエに三人の女性の救済を行わせ、その結果、フィリーネの場合には失敗し、リーディエとズザンネの場合には成功したことを示した。

— 5 —

だが、そもそも真の諦念とは無縁なフィリーネにマカーリエが祝福を与えること自体おかしいのではないか。また、Degering も言うように、甥のレナルドーに対してはマカーリエは情に溺れているのか全く見る目がない。マカーリエ自身、「家みんなが言うところでは私は甥を必要以上にいたわり、愛しすぎている。⁽³⁴⁾」と述べ、そのことを認めている。これは明らかに、「あたかも彼女には各人がつけている仮面を通して内的本質を見通すことが出来るかのようであった。」という先の引用に矛盾する。こうした「聖女」マカーリエの持つ矛盾はどのように考えればよいのであろうか。

注目すべき点は、フィリーネにしてもレナルドーにしてもいずれも結社の構成員であることである。ところで、マカーリエは法則に従い、宇宙を飛翔し、自己展開をしている存在であった。それ故、法則に従って発展するものはその本質において彼女と同質であり、それを彼女が拒否することは彼女自身の本質に矛盾し、ありえないことであろう。だから、歴史、社会の発展が必然的なものである限り、彼女がそれを肯定しようとするのは当然である。しかも結社はたとえ封建主義の枠内ではあっても従来とは比較にならないほどの社会発展を可能にする資本主義化を積極的に推進することを目差しているのだから⁽³⁵⁾、マカーリエが結社を全面的に指示し、両極端であってもいずれの諦念にも祝福を与えようとするのに何の不思議も無いのである。それ故、問題は、フィリーネに祝福を与えても無駄だということは何故マカーリエは理解していないのかということと、レナルドーに対しては何故見る目が無いのかということになる。この問題を考えるにあたってはもう一度ロマン派との関係に立ち返ってみる必要がある。

先に述べたように、マカーリエはロマン派、とくに前期ロマン派の対極を成す存在であったわけだが、ロマン派のもう一つの潮流である後期ロマン派の場合には事情が違って来る。たとえば Korff は次のように指摘する。前期ロマン派の「個人を至高のものとする思想」は、「その行き過ぎから己れのばかばかしさに気付き」、方向転換をした。これが後期ロマン派である。そして、「個人の使命は服従し、自分が至高のものだという妄想を捨て、大きな客観的な権力に従い、奉仕を通じてさらに大きな全体の一員になることである。」⁽³⁶⁾という思想がその特徴であると。また Linden は、前期ロマン派はシュトゥルム・ウント・ドラングと古典主義の統合であり、最盛期ロマン派(=後期ロマン派——筆者注)は古典主義と前期ロマン派との統合であると規定し、両ロマン派を明確に区別した上で、「最盛期ロマン派の目差すものは自然、歴史、国家、民族の生きた、神に基づく共同体、即ち生の永遠の力⁽³⁷⁾」ととらえる。さらに Blankenagel は、「解放戦争に刺激されて後期ロマン派は愛国的、国粹的なものになった。以前のコスモポリタンの、個人主義的な態度は自我は国家と国民に従うべしという要求に屈した。」⁽³⁸⁾と述べている。

彼らの共通の認識は、前期ロマン派では自己を強烈に主張する主観主義がその特徴であった

のに対し、後期ロマン派では反対に、絶対的な客観的存在に自己を服従させる言わば自己放棄がその特徴となっているということである。そこで、あらためてロマン主義と古典主義の特徴を確認しておく、永遠と有限の問題を扱っている点では両者は共通しているが、古典主義が永遠に有限の形式を与えることで有限の中に永遠を取り込み、永遠化された有限という両者の調和の実現を目差すのに対し、ロマン主義はその有限な形式と調和を拒否する。即ち、前期ロマン派では自己を絶対化し、永遠の存在にまで自己を拡大する傾向が強いし、また反対に、後期ロマン派では絶対者、永遠なものとして自己を対置させ、その中に自己を解消させることを通して全体と合体し、永遠とのこの一体感の中に陶醉しようとする傾向が強い。自己の人格も人間性も投げ捨て、ひたすら永遠で絶対的な全体に身を捧げ、服従することに悦びを感じるのが後期ロマン派の特徴である。そして、個の放棄と服従という後期ロマン派の主張の帰するところは、フランス革命の自由、平等の精神を再び覆して、国家と教会の失われた絶対的権威の復興を求めることであろう。それはまたこの時期のヴィーン会議と王政復古の反動化に完全に符合する。そして、マカーリエが執筆されたのもこの時期である。ということは、またマカーリエもロマン派のこの否定的な側面の影響を受けている可能性があるわけである。実際、後期ロマン派の主張する個の放棄と服従は、二種類の諦念の一つであるテレーゼの原理、即ち資本主義下での排他的競争原理にのっとり人格を放棄することと基本的には同質のものと考えられる。テレーゼの原理の人間には、自立した人格の前提の上に、目的意識的な確固たる信念とそれに基づく有意義な活動を通して、自己の存在に意味と価値を与えることも出来なければ、自己の有限性を脱して永遠に連なることも出来ない。そのため、こうした人間は主体性を放棄し、非人間化を強いる排他的競争原理に流されるまま、服従を通じて絶対的な全体に吸収されてそれと一体化し、そこに自己の存在の意味と価値を求めようとする。このような行動原理は後期ロマン派の思想からも、当然、結論として出て来ることである。つまり、ゲーテが意識するとしないにかかわらず、『遍歴時代』にははっきり後期ロマン派の要素が入り込んでいるのである。しかし階級的視点を欠いたゲーテには、諦念にはナターリエの原理とテレーゼの原理という肯定面と否定面の二重性があるという明確な認識に到ることは不可能であったし、ましてやテレーゼの原理が後期ロマン派と同質のものだと彼は知る由も無かったのではあるが、それにもかかわらずゲーテは後期ロマン派の持つ危険性がわかるにつれて、自分の文学の中にもその危険性が内在することを予感し始めたと思われる。しかし予感だけで、はっきり認識することは出来なかったため、ゲーテは古典主義の理念の形象化として最重要人物であるマカーリエに、テレーゼの原理を代表するフィリーネを祝福し、その原理を指針とする結社の指導者レナルドを溺愛するという、無知に基づくとしか思えないような不可解な行為を行わせることで、マカーリエの「聖女」としての評価に疑問の余知を残し、そして、長期に渡り心血を注いだ作品であるにもかかわらず、あえてその作品の価値を相対化することに踏み切ったのである。

かくして、諦念の苦しみから救済するために、またシュトゥルム・ウント・ドラングの復活

と押し寄せるロマン主義の波に対置すべく、マカーリエを創作することでゲーテは今一度古典主義を再生させた。しかし、古典主義の存立基盤がすでに失われていた時代に古典主義を存続させることには無理があり、それ故、それは歪んだものとならざるをえなかった。だが、この歪んだ部分、即ち諦念のテレゼ的原理を別にすれば、今日的課題に対し、マカーリエから汲み取ることの出来る教訓は依然として数多く存在する。その限り、難解であるにもかかわらず作品『遍歴時代』は最晩年のゲーテの傑作として不滅の価値と生命を持つのである。

注

テキストは Goethes Sämtliche Werke, Hamburger Ausgabe in 14 Bänden. Bd. 8, 7 Aufl. 1967 を使用。以下 H. A. と略す。

- (1) Julius Schiff: Mignon, Ottilie, Makarie im Licht der Goetheschen Nationalphilosophie. Jahrbuch der Goethe Gesellschaft, Bd. 9, 1922. S. 133.
- (2) Claude David: Goethes „Wanderjahre“ als symbolische Dichtung. Sinn und Form 8, No. 1 – 3, 1956. S. 120.
- (3) Hermann August Korff: Geist der Goethezeit. IV. Teil. Hochromantik. Leipzig. 1953. S. 652.
- (4) Hannelose Schlaffer: Wilhelm Meister. Das Ende der Kunst und die Wiederkehr des Mythos. Stuttgart. 1980. S. 185.
- (5) Erich Turnz: Anmerkungen. H. A. Bd. 8, S. 652.
- (6) ibid. S. 710.
- (7) Arthur Henkel: Entsagung. Eine Studie zu Goethes Altersroman. (Max Niemeyer Verlag Tübingen) 1964. S. 149.
- (8) Hans Reiss: Goethes Romane. (Francke Verlag Bern und München) 1963. S. 247.
- (9) Ehrhard Bahr: Die Ironie im Spätwerk Goethes. (Erich Schmidt Verlag Berlin) 1972. S. 127.
- (10) Thomas Degering: Das Elend der Entsagung. Goethes „Wilhelm Meisters Wanderjahre“. (Bouvier) 1982. S. 250–273.
- (11) Johann Peter Eckermann: Gespräch mit Goethe. den 6. Juni 1831.
- (12) 拙稿「『遍歴時代』の教育について——諦念の二重性——」(岐阜大学教養部ドイツ語研究室編「Meilensteine」第三号.1988年3月)参照。
- (13) ルカーチも、「固有の意味における古典主義時代は、イエーナの戦い〔1806年〕とともに終わる。」と述べている。G.ルカーチ著、道家忠道、小場瀬卓三・訳(岩波現代叢書)P.34.
- (14) 拙稿「『ローマの悲歌』への道——欲望と理性——」(名古屋大学文学部研究論集 23. 1976年)参照。
- (15) Johann Peter Eckermann: Gespräch mit Goethe. den 2. April 1829.
- (16) Goethe: Italienische Reise. Palermo, den 19. April 1787. H. A. Bd. 11, 7 Aufl. S. 266.
- (17) Goethe: Italienische Reise. Neapel, den 17. Mai 1787. ibid. S. 324.
- (18) Goethe: Glückliches Ereignis. H. A. Bd. 10, 4. Aufl. S. 540.
- (19) 筆者は以前、拙稿「ミニヨンと古典主義」の中で、原植物を人間に適用させたのがミニヨンであると述べたが、古典主義の出發を意味するミニヨンが魅力に溢れた人物であるのに比べると、マカーリエの魅力の乏しさにあらためて古典主義の終焉を痛感させられる。(「ミニヨンと古典主義」佐藤自郎教授還暦記念独逸文学論文集)参照。

- (20) H. A. Bd. 8, S. 115—116.
(21) *ibid.* S. 122.
(22) *ibid.* S. 122.
(23) *ibid.* S. 126.
(24) *ibid.* S. 127.
(25) *ibid.* S. 449—452.
(26) Eduard Spranger: Goethe. Die sittliche Astrologie der Makarie in „Willhelm Meisters Wanderjahre“ Tübingen. 1939. S. 362.
(27) この点に関しては Trunz も同様に、「我々がこの境界（もはや自我ではなく世界神秘，法則，無条件が存在する境界——訳者注）に接近すればするほどどんな恣意もますます停止する」（H. A. 8, S. 658.）と述べている。またこのことからマカーリエがロマン派の対極に位置していることがわかる。
(28) Hermann Siebeck: Goethe als Denker. Stuttgart. 1922. S. 66.
(29) *ibid.* S. 69.
(30) H. A. Bd. 8, S. 441.
(31) *ibid.* S. 441.
(32) *ibid.* S. 442.
(33) *ibid.* S. 442.
(34) *ibid.* S. 127.
(35) 拙稿『『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』——塔の結社の彼方に——』（岐阜大学教養部研究報告第20号，1984年）参照。
(36) Hermann August Korff: Das Wesen der Romantik. In: Wege der Forschung „Begriffsbestimmung der Romantik“. Darmstadt 1972. S. 212—213.
(37) Walter Linden: Umwertung der deutschen Romantik. In: Wege der Forschung. *ibid.* S. 255—256.
(38) John C. Blankenagel: Die Hauptmerkmale der deutschen Romantik.
In: Wege der Forschung. *ibid.* S. 335